華北農村訪問調査報告(5)：2010年12月,山西省の農村

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 弁納, 才一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30419

華北農村訪問調査報告(5)

―― 2010年12月，山西省の農村 ――

弁　納　才　一

はじめに

今回(2010年12月25日午後から27日午後まで)の山西省P県D村における調査は，2009年12月と2010年８月の調査に続く第３回目の本格的な調査である。なお，山西大学中国社会史研究センター側は大学院生を中心として2010年７月と10月にも調査を実施している[1)]。

今回のP県D村における聞き取り調査については，日本側の参加者は年齢順に内山雅生・弁納才一・祁建民・田中比呂志・首藤明和・河野正の６人であり[2)]，他方，中国側の参加者は郝平・毛来霊・常利兵・馬維強・李嘎・孫登洲と４人の大学院生の計10名だった。このように，今回は参加者が総勢16人となり，これまでの調査の中で最も大規模な調査となった。日本側と中国側が各々４グループを結成し，計８グループに分かれて聞き取り調査を実施した。

本稿では，まずP県D村における聞き取り調査のうち，前回までの聞き取り調査と同様に，山西大学の毛来霊氏の協力を得て筆者の弁納が担当した部分の内容を整理し，ついで参観・訪問した霊石県溝峪灘村や永済市近郊農村などについても簡単に記録しておくことにした。

なお，本稿でも，前稿までと同様に，煩雑さを避けるために原則として常用漢字と算用数字を用いることにし，また，プライバシー保護の観点から地名・実名を伏せることにした。

Ⅰ　P県D村

(1)　LZQ

LXQ氏宅を訪問した時，ちょうど昼食をとろうとしているところだった。冬は，農作業をせず，寒いので，遅く起き，朝食を10時頃，昼食は午後３時頃，夕食は８～９時頃にとるという。現在，２頭の乳牛を飼育しており，話を聞いている途中で，「蒙牛」公司の社員が搾乳をするためにやってきたので，聞き取りを中断せざるをえなかったが，その間に妻のLYZに話を聞くことができた。

聞き取り日時：2010年12月25日　15：00～16：45
聞き取り場所：LZQ氏宅
聞　　き　　手：弁納才一・毛来霊
通　　　　訳：毛来霊

LZQの個人史

・1950年７月25日生まれの寅年で，61歳になった。土地改革以前は14～15畝の土地を所有する「中農」だった。
・1958年，D小学校に入学して1963年まで６年間学んだ。
・W中学へ入学して３年間学んだ。冬期は，２日分の弁当などを持って学校の宿舎に１泊し，翌日の夕方頃に家に戻った。冬期以外は，毎日，歩いて通った。ややゆとりのある家の子供は自転車で通学していた。
・1966年に文革が始まると，学校が閉鎖されたので，中学校を卒業するのが翌年の1967年になってしまった。しかも，その年は高校でも入学試験を実施しなかったので，高校に進学することはできなかった。そのため，1967年に第７小隊に参加して１年間農業に従事した。
・1968年(19歳)，生産大隊革命委員会主任(JSL ？)の推薦で，D小学校の「民辦」教師となったが，報酬(「工份」＝労働点数)は，農業に従事する者と同じで，毎月30「工」(１工＝0.22～0.7元。成年男子は１日の労働で１工，女性は0.7～0.8工。)だった。当時，「公辦」教師(師範大学卒業者)の１ヶ月の

給与は，最も低い新卒で18元，最高は34.5元だった。1979年以降(？)，クラス担任をすると，毎月５元が加算された。

・1972年，親戚の紹介でLYZと結婚した。妻のLYZが内職で作った「鶏毛弾子」(鶏の毛で作ったはたき)を売って家計を助けた(詳細は後述の「LYZの個人史」を参照)。

・1979年，２回にわたって自留地の分配があった。１回目は１人当たり0.12畝，２回目は１人当たり0.2畝で，合計で１人当たり0.32畝だった。また，人民公社の解体に伴い，「民辦」教師の給与は県政府と生産隊から50%ずつ支給されるように変更され，県政府からは毎月17～18元の給与を支給されたが，生産隊にはお金がなかったので，生産隊からはほとんど支給されなかった。よって，1979年以降はそれ以前よりもかえって生活が苦しくなった。

・1980年，土地の再分配が実施された(公有地は分配されずに残されていた)。当時，土地は家族の人数と「農業労働力数」によって分配されたが，私は「民辦」教師をやっていたために，「農業労働力数」による土地の分配はなく，家族の人数のみによって分配された。すなわち，当時の我が家は５人家族で，１人当たり0.7畝の土地が分配されたので，合計で3.5畝の土地を分配された。

・1982～83年頃，再度，土地の再分配が実施された(本村の全ての土地が分配された)。この時は，家族の人数のみによって１人当たり1.82畝の土地が分配された。よって，当時の我が家は６人家族で，両親の分も合わせて14畝の土地を分配された。

・1990年頃から乳牛を飼育し始めた。

LYZの個人史

・1952年12月１日生まれの卯年で，60歳になった。本村から南へ約20里(10km)離れたY郷Y村の出身である。

・実家のY村では「鶏毛撣子」を作る人がやや多かったので，Y村の生産小隊の中には「鶏毛弾子」の生産を本業とする副業隊があり，私もそこに参加していた。Y村では解放前から「鶏毛弾子」が農村副業として生産されていた。ただし，母親はこれを作ることができなかった(他の村から嫁いできたためか？)。

・1972年にD村に嫁いでからも，家計を補助するために，「鶏毛撣子」を作った。ただし，作るのは主に冬の間だった。というのは，接着剤として使う膠が夏には臭いので，夏には作らなかった。1970年代は，P県城内に紡績工場があって，そこの労働者には上海人が多くいて，彼等はよく市場で鶏を買って自分たちでさばいて食べていた。その鶏の毛を1羽当たり0.05元で売っていた。そこで，夫のLZQがその工場の労働者用宿舎まで買い付けに行った。当時は，農民が物を売るために県城内に入ることはできなかったが，物を買うためにP県城内に入ることはできた。よって，夫のLZQが「集」(定期市)に出かけて行って売った。

・1979～80年以降，冬季に「鶏毛弾子」を1日6本作り，1本0.5元で売った。本村から約20里離れたC村では12月20日以降1日おきに「集」(定期市)が立ったので，夫のLZQが売りに行った。また，夫のLZQは自転車に乗って祁県城趙村にいた個人で鶏肉加工を行う者から材料の鶏毛を1斤0.3元で購入し，1斤の鶏の毛から6本の「鶏毛弾子」を作ることができた。さらに，柄の棒は1本0.01元で購入し，その他にもひもや粘着剤も購入した。年間で約100本を生産した。本村では「鶏毛弾子」を作ることができる者は他にはいない。そのため，本村民で「鶏毛弾子」を買いに来る者もいて，残りを市場で売った。

LZQの家族

・父(LPC，寅年)は，本村の私塾で3年間学んだという。4年前に82歳で逝去した。

・母(LCY，午年)は，81歳で，本村で1人暮らしをしているが，冬はXN村へ嫁いだ妹(LZL)の家(暖房設備がしっかりしている)に住んでいる。

・妹(LZL)は，戌年生まれの53歳で，3人の子供がいる。

・弟(LZW)は，午年生まれの45歳で，太原煤炭学校(中等専門学校)を卒業した後，P県煤炭管理局に就職した後，現在はP県林業局書記になった。大学生と高校生の2人の子供がいる。

・4人の子供がいる。長女(LHQ)は子年生まれの38歳で(？)，XN村へ嫁いだ(その夫は大工だったが，今は運送業に従事している)。次女(LHJ)は丑年生まれの37歳(？)で，XY村へ嫁いだが，小学・中学の子供の教育の

ためにP県城内へ移住し，夫はトラックによる運送業に従事している。三女(LHJ ?)は本村のWZA(その父はWB，その祖父はWXN)へ嫁いだが，WZAが太原の広告会社に勤務しているため，一家が太原に移り住んでいる。長男(LN)は西安市の西京学院を卒業し，現在，3女の夫の広告会社で働いている。

(2) TBM

TBM(1936年生まれ，75歳)については，すでに郝平氏が聞き取りを行っているので，今回，個人史に関する聞き取りは省略した。次男の子供2人が遊びに来ていた。TBM夫妻はそろって毛沢東時代は良くなかったと何度も繰り返して嘆いていた。

聞き取り日時：2010年12月26日　9：30～11：45
聞き取り場所：TBM氏宅
聞　き　手：弁納才一・毛来霊
通　　訳：毛来霊

TBMの家族

・妻(LYL，未年，68歳)は，L(DL)村の出身で，父親は十数台の織布機(木機)を所有して購入綿糸で土布を生産していた。手伝いをしたことがある。
・父はTFKである。母(TH氏)は，東南へ6～7里離れたJ村の出身で，紡織ができた(自家消費用)。
・祖父はTJGである。
・TBMは5人兄弟の末弟で，4人の兄は全て死去し，また，XB村とL村に嫁いだ2人も死去した。
・3人の息子と2人の娘がいた。長男(TCY，卯年，48歳)は中学を卒業した後，本村で農業に従事しており，その妻(WCP，未年，44歳)はW村の出身で，小学を卒業した。次男(TCH，巳年，46歳，同一敷地内の隣の棟に居住)は中学を卒業した後，農業に従事していたが，1989年頃からは農業をしながら冬が来る前に「蜂窩煤」(練炭)を祁県まで運ぶ仕事(運送業，

1日1回3,700個の練炭を運送)に従事しており(同敷地内にトラックが駐められていた)，その妻(HBX，午年，45歳)はP県城内(東城)の出身で，中学を卒業し，長女(TXL，申年，19歳)は中学を卒業した後，「2元」スーパーで働いており，次女(TXH，亥年，16歳)は中学2年生で，普段は学校の近くの家に間借りして住んでおり，長男(TXL，寅年，13歳)は小学6年生で，今年9月に満12歳の誕生会を盛大に行った(その時の写真を見せてくれた)。3男(TCW，亥年，1971年生まれ)は中学を卒業した後，太原市の肉屋に勤めていたが，9年前に喧嘩になって殺され，その妻(LRP，未年，44歳)は里村の出身で，中学を卒業した。一方，長女(TSM，未年，44歳)は新荘へ嫁ぎ，次女(TXM，丑年，38歳)はP県城内(北城)へ嫁いだ。

3年困難時期

・人民公社時期は第8小隊に参加した。第8小隊の隊長はWYCで，副隊長はTHSだった。

・1959～60年，本村内では180人が餓死した。1959年には「口糧」の配給が全くなかった。農作業をしに行くと，蔬菜や窩窩頭(玉蜀黍・高粱・粟の粕や糠で作った三合面)を少しもらうことができた。玉蜀黍の芯までつぶして食べた。当時は家畜以下の食生活だった。

・1961年8月に結婚したが，当時はとても貧しく，結婚式にはお金をかけることができなかった。

抗日戦争時期

・5～6歳頃，村に何十人もの日本兵がやって来た。日本兵は銃を持っていたが，私はまだ子供だったので，怖いとは思わなかった。日本兵から飴をもらったことがある。日本兵といっしょに来た中国人の「便衣隊」はいろいろと悪いことをしたと聞いている。

・夜になると，我が家に八路軍がやって来て宿泊し，朝早く出て行った。当時は，我が家が村の東側の一番端にあったので，何かあった時に逃げやすかったからだろう。この八路軍はP県の人が多く，本村人も何人かいた。その隊長としては，許瞎子(汾陽出身)と小陳(文水県か交城県の人)が有名だった。

抗日戦争終結直後と第二次国共内戦

・1945年8月に日本兵が撤退すると，まず八路軍が村にやって来て小学校

を開校した。その時の校長は八路軍の武郷言(山西人)だった。この学校に1年生として1年間通った。この後,閻錫山軍がやってきて内戦となったので，3日間，休校となった。その後，閻錫山軍が学校から共産党の校長や教員を追放して国民党系の教員に入れ替えて学校を再開した。4年生(1949年)まではD村の小学校で学んだ。D村には初級小学しかなかったので，高級小学の5年生はL村で，6年生はN村で学んだ。

(3)　TBM

TBM氏宅に到着した時は，ちょうど昼食を終えつつあるところだった。午前中にTBM氏宅で聞き取りを終えた後に，午後に再来することを告げていたためか，家族の者が何人か集まっていた。

聞き取り日時：2010年12月26日　15：00～15：40
聞き取り場所：TBM氏宅
聞　き　手：弁納才一・毛来霊・河野正
通　　訳：毛来霊

妻の実家(L村)における織布

・解放前，私(LYL)の父親が長寿村に住んでいた古くからの友人の家の一部を借りて織布作業場として使用していた。3～4人の賃金労働者を雇用して十数台の織布機で新土布(機械紡績糸である洋糸を購入，布幅が広い)を生産していた。L村の私の実家にも2台の織布機があって父と父の弟の2人が新土布を生産していた。L村には織布を行う家が2～3戸あった。
・解放後，私の両親が離婚すると，C村にあった織布機のうち7台を作業場を貸してくれていた友人にあげて，それ以外の織布機は売却した。L村の自宅にあった織布機も1台だけを残して，父・私(LYL)・妹の3人で織布を行った。棉花を購入して紡糸を他人に委託して土糸を使用して旧土布(幅が2.4尺で狭い)を生産した。少なくとも，私(LYL)がD村に嫁いで来た時まで織布を行っていた。

TBMの母(TH氏)による紡織

・母は，私(TBM)が20歳の時に亡くなるまで，紡糸・織布を行っていた。原料の棉花は自分の家で植えたものを使用した(D村はアルカリ土質なので，小麦の栽培には適さなかったが，棉花の栽培には適していた)。母が亡くなった後は，紡糸・織布はやらなくなったが，1982年からは20畝の土地に棉花を栽培し，１畝当たり50～60斤の収穫があり，大きな利益が上がった。

土塩の生産

・このあたりはアルカリ土なので，解放前は土塩を生産してもうかった。７斤の土塩は小麦１斗と交換することができた。

・解放後は個人で土塩を生産することはできなくなったが，生産隊などの集団で土塩を生産した。

(4)　LZQ

LZQ氏宅に到着した時，LZQ氏はちょうど自宅で搾乳の作業を終えたところだった。

聞き取り日時：2010年12月26日　15：50～16：50

聞き取り場所：LZQ氏宅

聞　き　手：弁納才一・毛来霊・河野正

通　　訳：毛来霊

家族

・父は一人っ子だったので，他に兄弟姉妹はいなかった。祖父の名前はLZGである。

土地改革

・１度，土地を没収され，以前と同じくらいの土地を分配されたが，農地の場所は以前と異なっていた。

互助組

・10戸の農家が互助組に参加した。この互助組に一番最後に参加したのは

MSRだった。

W中学時代の同級生

・W中学へ通学した本村の同級生は20～30人いて，同じクラスの同級生はWZQ・WY(10余り前に死去)・WLF(本村のTWCと結婚)・WSM(本村人の夫ともに太原へ出稼ぎにいっている)・WYQ(霊石県へ嫁いだ)の6人だった。最近，同窓会を開いた。

第7小隊

・第7小隊の隊長はMRRだったが，1979年頃，2～3年間はHLYが隊長になった。

「民辦」教師

・全校生徒数は600人くらいで，1クラスは50人くらいだった。教師のうち約3分の1(十数人)がD村出身(生産隊から派遣)の「民辦」教師で，当時はWD・TBW・HLZ・WRH・TWL・WYJ・WHW・WXF・WLX・DLなどがいた。月給はわずか30元だった。D小学校で「民辦」教師を1986年まで続けた。一方，「公辦」教師(師範大学卒業者)はみなP県城の出身で，P県教育局から派遣されていた。

・1987年と1988年の2年間，T小学校へ月給100元(「民辦」教師をやっていた時の3倍以上)で務めた(T小学校の校長に引き抜かれた)。当時，T村では多くの農家が乳牛を飼育しており(道備村では少なかった)，搾乳で1日1頭当たり5元(1ヶ月で150元)の収益があったのを知って，教師をやめて実家で乳牛を飼育することにした。

・人民公社時期，全部で11あった生産大隊のうち，W村は最も豊かで，教育にも熱心だった。

乳牛の飼育

・1989年から乳牛1頭を2,000元で購入して飼育し始めた。搾乳することができる期間は，1～8年と牛によって大きく異なっていた。

・2008年，「蒙牛」事件が発生し，牛乳の買付け価格は1斤0.5元になって利益が出なくなったので，乳牛を全て肉牛として1斤16元(1頭当たり約3,000元)で売った。一般的に，1頭当たり乳牛は肉牛より肉の量が少ない。

・現在，T村は乳牛を飼育する農家は少なくなっている。搾乳による利益

が少なくなってきているので，むしろ出稼ぎが増えている。

(5)　HDS

妻のSMYがいっしょにいて，いろいろと補足説明をしてくれた。なお，山西大学側がすでにHDS氏に対する聞き取りを行っているので，今回，個人史に関する聞き取りは省略した。

聞き取り日時：2010年12月27日　９：15～10：50
聞き取り場所：HDS（1935年生まれ，亥年，76歳）氏宅
聞　き　手：弁納才一・毛来霊
通　　訳：毛来霊

家族

・父（HYC，亥年）は，1962～63年頃，65歳で亡くなった。祖父はHGTである。
・母（SYX，亥年，WL村出身）は，後妻で，私（HDS）が63歳の時に87歳で亡くなった。先妻は子供を産まずに死去した。
・妻（SMY，1941年生まれ，巳年，70歳）は，W村の出身で，1961年に本村に嫁いできた。1960年にはW村の餓死者はD村より少なかった。このあたり一帯では，D村の餓死者が最も多かったと聞いている。５人の子供がいる。
・長女（HLJ，辰年，47歳）は，N村へ嫁いだ。その夫（RKX，46歳）は農民だが，N村は土地が少なく，１人当たり0.8畝しかないので，あちこちで「打工」している。長女は長男（19歳）・長女（17歳，高校生）を生んだ後，避妊治療を受けたが，手術の仕方が良くなかったので，次男が生まれた。一人っ子政策に違反したということで，１万元の罰金を支払わされた。
・次女（HLY，午年，45歳）は，W村へ嫁いだ。その夫（陳義）は農民だが，「馬花児」・「餅子」・ケーキなどの食品を工場から買い付けて三輪自動車で商店へ卸す仕事をしている。ケーキは自分の家でも作っている。次女には長女（16歳）と長男（15歳）の２人の子供がいる。
・長男（HSC，申年，43歳）は，陽泉煤炭学校を卒業し，P県城内に住んで，鉄道部第12局で鉄道建設に従事している。その妻（LAW，P県城内出身）

は，山西大学を卒業した。長男には12歳と９～10歳の２人の娘がいる。

・次男(HLC，亥年，40歳)は，農業をしながら，工芸品の部品を作っている。その妻(LYL，41歳，戌年)は本村から東南へ５～６里離れたY村の出身である。次男には長女(16歳)と長男(15歳)の２人の子供がいる。

・三女(HLJ，37歳，寅年)は，本村のWXL(37歳)と結婚した。WXLの父のWDM(60歳代)は農業をやりながら，冠婚葬祭の時にはコックをやっており，WDMの父はWHZである。現在，夫婦でP県城内の柳根路でケーキ屋(皇冠蛋糕店)を経営している。三女には長女(16歳，亥年)と長男(13歳，寅年)の２人の子供がいる。

結婚式

・結婚式にはあまりお金を使わなかった。「聘礼」(結納金)15～20元と新婦の新しい衣服を用意した。妻を生産大隊の馬に乗せて村に迎えた。迎える時，ラッパを鳴らし，太鼓(「洋鼓」)を叩いた。宴席には10卓で50～60人を招待した。

解放前の経済状況

・我が家は10.8畝の土地を所有する貧農で，高粱・玉蜀黍・粟・豆などを栽培していた。父(HYC)の先妻の姉の夫であるPSFから，親戚のよしみで，１頭の驢馬を飼育するかわりに使用させてもらった。PSFはもともとは本村人だったが，子供はなく，労働力が少なかった上に，介休県張蘭鎮でケーキ屋を経営していたので，農繁期には裴氏の土地(約10畝)でも農作業をしてあげた。解放直前に，この驢馬が死ぬと，このような関係もなくなってしまった。

土地改革

・土地改革では，１人約2.5畝の土地を分配された。我が家は６人家族だったので，合計で約15畝の土地を分配された。

互助組

・互助組には参加しなかった。このあたりでは互助組に参加した家は少なかった。互助組に参加すると，いろいろと制限されて自由がなくなるから，参加する気になれなかった。ただし，この時期も，解放前と同様に，「変工」や「換工」を行っていたし，今現在でも行っている。

初級合作社

・1954年冬に動員されて「自願」して初級社に参加した。参加しなかった家もあった。

高級合作社

・1956年に高級社（紅旗社）には全戸が参加した。村にトラクター站が設置されてトラクターが導入されたので，集団で農作業をせざるをえなくなった。

耕作体系

・春に高粱か玉蜀黍の種を蒔き，秋に収穫するが，途中で大豆や黒豆を間作し，もし水が充分にあれば，秋に小麦の種を蒔く（アルカリ土壌であるため，小麦の播種は非常に少ない）。

(6)　LTW

LTW（1945年生まれ，酉年，66歳）氏については，すでに内山雅生氏が聞き取りを行っているので，今回，個人史に関する聞き取りは省略した。また，LTWは右手と片足が不自由だが（脳卒中の後遺症か？），本人は記憶ははっきりしているというものの，自らが活躍した人民公社時代以前のことについては記憶は極めて不鮮明である。例えば，互助組については十数戸の家が参加したとするのみで，それ以上の詳しい事情については一切記憶になく，初級社や高級社についても記憶がはっきりしなかった。

聞き取り日時：2010年12月27日　15：10～16：40
聞き取り場所：LTW氏宅
聞　き　手：弁納才一・毛来霊
通　　訳：毛来霊

家族

・祖父（LXB）は，一人っ子で，N村から本村に移り住んできて，70歳くらいで死去した（会ったことはない）。父（LJF，申年）は，1958年に51歳で死去した。父の姉（名前は不詳）はH村へ嫁ぎ，70歳くらい（私が11歳頃）で

死去した。父の弟(LJG)は34歳で病死した。

・1965年(22歳)に結婚した。妻(HJX，1947年生まれ，亥年)は，本村の西北にあるNL村の出身で，その父親は太原電信局の労働者だったが，1962年に村にもどされた。

・兄弟姉妹は全部で7人。弟(LTW，58歳，巳年)の妻(WJX，58歳)は本村人(父親はWDH)で，6歳の時に父親が亡くなった。上の姉(LGZ，74歳，子年)はDY村へ嫁ぎ，その夫はP県鉄業局の「職工」だったが，3年前の12月27日に72歳で亡くなった(我々が訪問した当日，三周忌が行われたという)。下の姉(LXZ，72歳，寅年)は本村のWXL(丑年。今年，死去。その父親はWLJ)へ嫁いだ。1番目の妹(LLL，亥年，64歳)は母の姉の家(本村から東北へ約11里離れたL村，その夫のLJCは農業に従事)の養子となった。2番目の妹(LCZ，卯年)は本村から北方へ約20里離れた文水県北済村のRXN(申年，67歳，農業に従事)へ嫁いだが，2年前に58歳で亡くなった。3番目の妹(LAL李愛蘭，54歳，酉年)は本村から西北へ5～6里離れたXW村のWBZ(1～2歳年上で，大工)へ嫁いだ。

・5人の子供がいる。長男(LFL，44歳，未年)は本村で農業をしているが，冬は20万元余りで買ったブルトーザー(それまでの仕事でお金を貯めた)を使って工事現場などで仕事をしており，その妻(HSL，43歳，申年)は本村のHLQ(70歳代で亡くなった)の娘である。長女(LFP，43歳，申年)は本村のWP(45歳，午年，農業兼大工。その父親のWCYは81歳で健在である)へ嫁いだ。次女(LFX，40歳，亥年)はN村のWJL(40歳，農業兼小売業に従事)に嫁いだ。次男(LFG，38歳，丑年)は汾西鉱務局の労働者で，その妻(YML，39歳)は孝義県の小学校で教師をやっており，一家は孝義県に住んでいる。三男(LFD，34歳，巳年)は農業兼レンガの運送に従事しており，その妻(SYL，35歳)はW村の出身である。

人民公社

・1968～72年に第8生産小隊長を務めた。第8生産小隊には副業として2人の脚の不自由な老人2人による「土塩」の生産と二輪車(「平車」。1台60元で売った。)の製造があった。二輪車のうち，車輪を除く木の部分の製造にかかわったのがTYS・TYF・TSY・TZSの4人で，鉄の部分を作る鍛

冶屋を担当したのがTYL・WYXの２人だった(TYS・TYF・TYLは兄弟だった)。

・1972～75年の３年間は，生産大隊の「猪廠」(300～400匹の豚を飼育する養豚場)で指導員を務めた。生産大隊では，緑豆・大豆・馬鈴薯を購入して粉条(春雨)や豆腐を作り，その粕は豚の飼料にした。さらに，豚の糞は肥料として配下の10の生産小隊へ販売した。

・1976～85年，生産大隊長(村長)を務めた。

1980～81年の土地の再分配

・１人当たり1.8畝の土地が再分配された。我が家は５人家族だったので，合計で９畝の土地を分配された。

II　訪問・参観

P県D村における聞き取り調査を終了した後，霊石県の農村に立ち寄ってから，山西省中部農村と比較するために，同省南部の運城市へ移動した。本来は，運城市近郊の農村を参観する予定だったが，山西大学中国社会史研究センターが2011年から運城市の南に隣接する永済市政府と協力して農村部の公文書に関する調査を実施することになっていることから，同省南西部の永済市近郊農村を訪問することになった。

(1)　霊石県溝峪灘村－2010年12月28日　９：30～10：00，
　　12月30日　13：40～14:00

溝峪灘村(**写真１**を参照)は日中戦争中に日本が調査を実施した村である[3]。汾河に沿って国道(108号)があり，かつてはその国道沿いの山の斜面に窰洞を作って住んでいたようであるが(現在でも住んでいるかもしれない)，現在は，その国道沿いに新しい家(店舗などを兼ねている)が建てられている。国道と山との間にわずかに耕地があるが，玉蜀黍の枯れた茎が残っているだけで，冬は全く作付けは見られない。

現在，かつての溝峪灘小学校は幼稚園として使用されており，その中の１室に村民委員会が置かれているが(**写真２**を参照)，村の書記は不在だったの

写真１．溝峪灘村

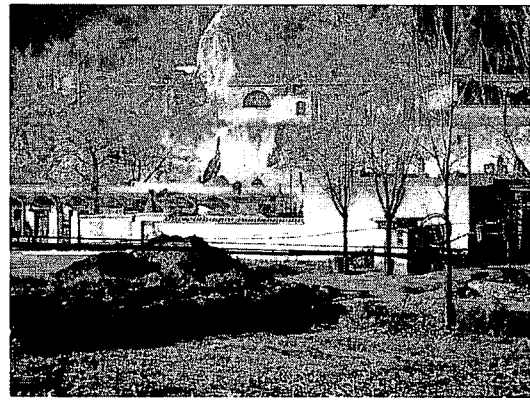


写真２．旧溝峪灘小学校

で，２日後の30日に再訪した。だが，結局，12月30日も村の書記には会うことができなかったが，村の会計(李治全，65歳)に応対していただき，簡単な説明を聞くことができた。

溝峪灘村の現況

・全村の戸数は約170戸で，人口は約500人である。全耕地は約100畝で，１人当たりわずかに0.2畝の土地しかない。山の斜面にある窰洞には現在も村民が居住しているが，空き家となっているところもあるという。

・政府によって個人による石炭採掘は禁じられ，緑化運動として山には植樹するように言われている。
・夏に玉蜀黍・豆類・甘藷・蔬菜などを栽培しているが，食糧は自給することができないので，不足分の食糧は購入している。
・本村では，現在，冬は農業をやらないので，出稼ぎに行く者は多いが，どこに働きに行っているかは，村の幹部でも把握することはできていない。
・本村内には抗日戦争時期のことを知っている80歳代の老人がおり，次回の訪問調査において聞き取りが可能であるという。

⑵　解州市関帝廟－2010年12月28日　16：30～17：30

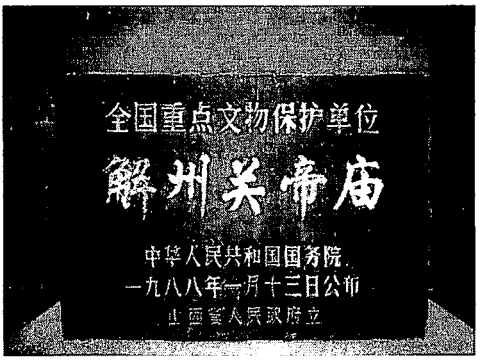
運城市内から西方へ車で30分余りのところにある解州市の関帝廟は，中国の中で最大の関帝廟であるという(敷地面積に関してか？)。解州市関帝廟には運城市内のホテルにチェックインする前に訪問した(**写真３・写真４**を参照)。

⑶　永済市近郊農村－2010年12月29日　午前

まず最初に，山西省南西部に位置する永済市政府を訪問して，農村経済の現況について簡単な説明を受けた。棉花の栽培も盛んなので，土布の生産も盛んだったという。また，地方志(県志や村志)などの刊行状況についても説明を受け，永済県志編纂委員会編『永済県志』(山西人民出版社，1991年)数冊と永済

写真３．解州市関帝廟

写真４．解州市関帝廟



市趙伊村志編纂委員会編『趙伊村志』山西省内部図書(2003年) 1 冊をいただいた。

ついで，永済市近郊のモデル農村(「新農村」)となっている蒲州鎮北文学村を訪問した。この村の広場に到着すると，並べられたテーブルの上にとれたてのミニトマトを山盛りにした大皿がいくつか置かれ，横断幕が張られており，歓迎を受けた。蒲州鎮長の麻氏が簡単な説明と案内をしてくれた(写真５・写真６を参照)。この村は2009年からミニトマト(日本の品種)をビニールハウスで栽培するようになった。永済市政府から農家に対して「恵民卡」(優遇カード)が配布され，農家は農業銀行から年利0.006%という超低金利で最大３万

写真５．北文学村

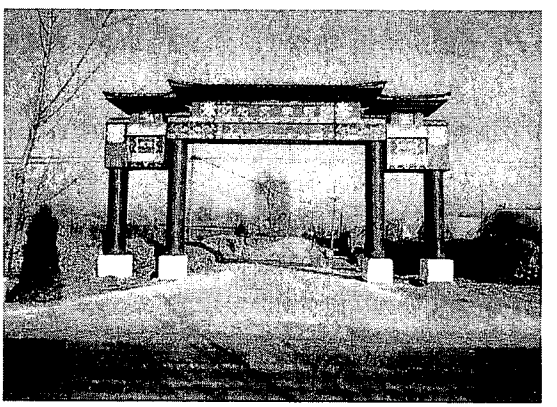
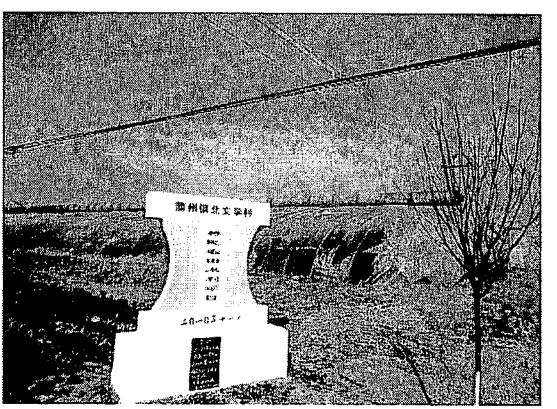


写真６．北文学村のビニールハウス



元まで農業資金を借り入れることができたという。また，３年後の2012年までに借入金を完済すれば，最高で30万元まで再び借り入れることができるという。

最後に，永済市政府が強く薦める普救寺（『西廂記』の舞台が再現されており，観光地化されている）を参観した。土産物の１つとして土布で作った服が売られていた（綿作と土布生産が盛んだった名残を感じた）。

おわりに

これまでの調査と同様に，中国山西省の農村の事情を熟知している毛来霊氏に通訳していただいたおかげで，非常に順調に聞き取りを実施することができた。

今回の聞き取り調査では，文革時期においてすら，P県D村が自給自足的な状況にとどまることができなかったこと，人的及び経済的に本村の境を越えた流動性が見られたこと，社会経済的活動が一村落内で完結しえない状況にあったことなど，山西省農村社会の特質について考える上で極めて重要なヒントになると思われる実態の一面を窺い知ることができた。

また，モデル農村（「新農村」）ではあったが，山西省南部の農村を参観することができたことは，同省中部に位置するP県D村と比較検討する際に参考の一助となるであろうし，さらに，次回は霊石県溝峪灘村についてより具体的な話しを聞くことができるのではないかという期待が持てた。

なお，山西大学中国社会史研究センターと共同で行う次回の山西省農村調査は，2011年８月を予定している。

注

1）これまでの調査内容をまとめたものとして，拙稿「華北農村訪問調査報告(1)－2007年12月，山西省太原市・霍州市農村」（『金沢大学経済論集』第29巻第１号，2008年12月）・同「華北農村訪問調査報告(2)－2008年12月，山西省太原市・霍州市・平遙県農村」（北陸史学会『北陸史学』第57号，2010年７月）・同「華北農村訪問調査報告(3)－2009年12月，山西省P県の農村」（金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第42号，2011年２月）・同「華北農村訪問調査報告(4)－2010年８月，山西省P県の農村」（『金沢大学経済論集』第31巻第２号，2011年３月），内山雅生・三谷孝・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(1)」（長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第11号，2010年12月），田中比呂志「華北農村訪問調査報告(1)－2009年12月，山西省P県D村」（『東京学芸大学紀要（人文社会学系Ⅱ）』第62集，2011年１月）がある。また，山西大学側の調査内容をまとめたものとしては，行龍・郝平・常利兵・馬維強・李嘎（弁納才一訳）「山西省農村調査報告(1)－2009年12月，P県の農村」（金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第42号，2011年２月）を参照されたい。

2）2011年３月に逝去された三谷孝先生（一橋大学社会学部名誉教授）はすでにその頃には体調がすぐれなかったのか，今回の調査には参加していただけなかった。

3）『山西省霊石県第三区溝峪灘村ニ於ケル労働力資源調査概況報告』（北支那開発株式会社，1942年）。